

日本語上級研修コースの取り組み

－ 渡日前入学許可制度の学生を対象にした新しいコースの設定－

橋本 智

HASHIMOTO, Satoshi

徳島大学国際センター

要旨：渡日前入学許可制度が開始され、次年度 4 月からの入学が許可された学生を対象とした「日本語上級研修コース」を開講した。開始前（カリキュラム作成時）の学生の日本語レベル判定が難しく、クラスの設定と実際の学生のレベルが十分にあってはと言えなかった。また、技能別にコースのクラスを分けたが、どのクラスでも日本語運用を伸ばすための総合的な活動を行っており、今回初めて開講した本コースが効果的なカリキュラムで展開できたかを、しっかり検討しなければならない。

キーワード：渡日前入学許可制度、日本語上級、科学技術日本語

1 はじめに

徳島大学では渡日前入学許可制度が始まり、学生 2 名の 2017 年度の入学が決まった。この学生は自分の国で 2 年程度集中して日本語を学習してきており、日常生活での日本語使用に大きな問題はないものの、学部に入學した際、日本人学生と同じように講義を聞き、予習や復習をし、レポートを書いたりする能力は十分ではない。そこで、入学半年前に本学に来て、日本語を集中して学習するプログラムを設定した。

2 コース前の日本語レベル

初めてのコースを組み立てるにあたり、学生の現時点での日本語のレベルを見る必要があった。学生は日本にいないため、スカイプによる面接を行い、作文の課題を出した。

スカイプによる面接は一人 10 分程度で、①自己紹介、②自分の住んでいる場所や有名な所、③好きなテレビや映画に関する質問をし、答えてもらった。

学生 A は、基本的な会話はできるが、こちらの質問に対して受身の対応で、直接的な質問に短く答えたり情報を提供しようとしたりするものが精一杯だった。自分の意図することを表現できるが、適切な文や語彙を探そうとして、何度も言い淀んだりする。文単位で話し、段落では話さない。

発話例（1）

T：自分の街を紹介してください。

S：XX です。静かな街です。人口について、ちょっと少ないです。山がたくさんあります。XX で有名なものは？？？です。

T：？？？は食べ物ですか。

S：はい。

T：どんな食べ物ですか。

S：米から作りました。柔らかいです。

テレビを見るか、という問いに対して、NHK を見ると答え、あるニュースに関してかなり細かく答えた。それまでの単文での発話と異なり、多くの情報を正確に述べた。これは、所属している日本語学校で決められたトピックについて話す練習をしていると考えられる。これらの点を考慮し、発話に基づく日本語レベルを「中級一下」とした。

学生 B も返答が受け身的で、直接的な質問に対しては問題なく答えていた。しかし、ある程度の情報を伝えられても、考えを関連付けたり、時制やアスペクトを正確に用いたりできない。また、自分なりの文を作り、連文の形で発話し、自分の意図することを表現できるが、発話が途切れ、発音・語彙・文法が正確ではなく、段落では話さない。

発話例（2）

T：どんな絵を書くんですか。

S：景色と言う絵を描いていました。

T：どんな景色ですか。

S：梅を作るというものです。

ニュースについて聞くと、TPP に関して答えたが、それまでの日本語とは異なり、よどみなく細かい点まで答えていた。これは、学生 A と同じ理由だと思われる。以上のことから、発話に基づく日本語レベルを「中級一中」と判定した。

作文の課題は「日本語学校に入學したことをきっかけに、自分自身がどのように変わったかを書いてください」というもので、変化が分かる具体的な経験やエピソードを書くように指示した。また、辞書を使っても構わないが、先生や友達に聞いて直したり、インターネットを使ったりしないことも求めた。手書きで書き、所属している日本語学校の教員を通して、スキャンしたものをメールで受け取った。

学生 A、B とともに、面接した際の日本語レベルとは大きく異なり、作文では日本語の文法の間違いはほとんど見られなかった。普通体と丁寧体の間違い、接続詞の使い間違いなどが見られたが、内容、日本語ともに、上級レベルのものだった。

全体の構成もよくできており、最初の導入部分の段落もよく考えられたものだった。

作文例 (学生 A)

人生にはだれでもじぶんがかわることがある。私にとって、XX 日本語学校に入って生活や勉強したあとで、学校に入る前に比べて自分や考え方が成長したと思う。

作文例 (学生 B)

XX 日本語学校に来て、もうすぐ 2 年になる。時間はアツという間に過ぎた。XX 日本語学校に来る前から、憧れていたことがいっぱいあり、家族と離れて、自分の道を自分で切り開くと決めていた。

学生はまだ自国の日本語学校に在籍していたため、どのような状況で作文が書かれたかを明確に知ることはできない。ただ、口頭の日本語レベルと作文の日本語レベルには大きな違いがあり、それは学生の能力によるのか、日本語学校の指導の仕方によるのか、あるいはそのほかの要因があるのかは分からなかった。

3 コース概要

当初は上級レベルの学生を受け入れ、学部の授業についていけるだけの日本語運用能力を目指す予定だったが、学生のレベルは中上級であると判断し、四技能を底上げするようなカリキュラムを組むことにした。一方で、理系の学部に入学するため、理系の語彙や表現を学ぶ必要もあるため、それに対応した日本語学習のクラスも設定した。

徳島大学国際センターでは、毎学期日本語未習者を対象にした「日本語研修コース」を開講している。今回の渡日前入学許可の学生を受け入れるにあたり、新たに「日本語研修上級コース」を作り、この初級コースと区別した。期間は大学の暦に合わせ、16 週とした。ただ、16 週に加えて最後の 1 週間程度は、修了式でのプレゼンテーションの準備などにあてた。

以下は、2016 年後期の「日本語研修上級コース」の概要である。

	月	火	水	木	金
1-2				日本語表現 1	日本語聴解 1
3-4	全学日本	科学技術	日本事情	日本事情	

	語 D1	日本語 2	II	IV	
5-6		日本語表現 2	日本語文法・語彙	全学日本語 D1	
7-8	科学技術日本語 1				日本語読解
9-10		日本語 6			日本語聴解 2

① 全学日本語 D1

中級レベルの総合的な日本語運用能力を養成する。読解、聴解、語彙、慣用表現、会話などを扱う。このクラスは本学の外国人留学生を対象にしたコースであり、研修上級コース参加学生が加わる形をとった。中級レベルではあるが、上級コースの参加学生にとっては基本的な部分の復習ができる。全学日本語コースは 10 週行われるため、上級コースの参加学生にのみ、本来の全学日本語コース D1 の開始前と後に 2 週間授業を行う。教科書：「みんなの日本語」中級 II 1 課～6 課

② 科学技術日本語 1、2

学部入学したときに理系の用語・表現などを聞きとったり、書いたりすることができることを目標にした。科学技術日本語を学習し、日本語での理系の講義や教科書が理解できるようにする。教科書：「科学技術基礎日本語 留学生・技術研修生のための使える日本語」凡人社

③ 日本語表現 1

大学で必須の「書く力」、アカデミックレベルの文章を書く技術を養成するとともに、ライティング力の基礎を見直し強化する。表現の練習、具体的な場面を想定した実践練習、そして応用へと進む。短文から始め、段落構成、長文へと書き方を学ぶ。その過程で、自らの固定化した間違いに気づき、正しい日本語表現を考える。

教科書：「大学で学ぶための日本語ライティング」ジャパントイムズ

④ 日本語表現 2

日本語の「書く」技能の力の向上を目指す。「とくしま異文化キャラバン隊」を中心とした学内外の活動を通して、事実と考えたことや感じたことを区別して記述する。また、そ

これから今後の課題を自ら見つけ取り組むことも表現する練習をする。

教科書：「日本語の書き方」岩波ジュニア新書

⑤ 日本語文法・語彙

中級～上級 (N1 レベルの語彙、漢字、文型を習得する。日常生活だけでなく、大学での講義を聞いたリレポートを書いたりするときに必要な漢字や語彙、文型を学ぶ。

教科書：「考える漢字語彙・上級編」ココ出版 (漢字は自学習)、「にほんご語彙力アップトレーニング」アルク

「どんなときどう使う・日本語表現文型500」アルク

⑥ 日本語聴解 1

大学で学ぶために必要な日本語、特に講義や口頭発表を適切に聞くための聴解力を養成する。毎回ひとつのテーマについてのまとまった文章を音声で聞きとり、内容の理解を確認する。文章全体の構成を意識しながら要点をまとめて答える練習をする。テーマについて話し合いやディスカッションをする。

教科書：「留学生のためのアカデミックジャパニーズ聴解 中上級」スリーエーネットワーク

⑦ 日本語聴解 2

書いたり読んだりする中・上級の語彙は豊富なのに、聴解では聞き取れないという問題を解消するために、耳で聞き理解できる中・上級の音声語彙を増やす。また未知の語彙に遭遇した際、その意味を類推したり聞き飛ばしたりするスキルを強化し、得た情報に対して適切に反応できるようにする。同音異義語や似ている音を持つ語の問題、文化的社会的な背景知識の有無の問題などにも配慮しながら、聴解力のレベルアップを図る。

教科書：「中級から上級への日本語なりきりリスニング」ジャパントイムズ

⑧ 日本語読解

大学で受講する授業の教科書や、配付される資料を自力で読み、概要を理解できるようになるための技術を身につける。難しそうな文章だと感じてあきらめることなく取り組めるように、既習の文法や語彙の復習・強化もする。

教科書：「留学生のための読解トレーニング」凡人社

⑨ 教養教育院の科目に参加 (聴講)

「日本語6」「日本事情Ⅱ」「日本事情Ⅳ」

⑩ 専門科目の授業に参加 (聴講)

学生の学部の受け入れ教員の授業にも参加した (それぞれの学生が1科目を聴講)。

⑪ その他

上記の授業に加え、自習用の (本学の教員がネットで公開している) ビデオの視聴、修了式でのスピーチなどを行った。また、「とくしま異文化キャラバン隊」の行事に参加し、地域の人たちとの交流をして教員以外の日本語と触れ合ったり、国際センター主催のスタディーツアーや文化体験旅行に参加したりした。

4 コース終了時

コース終了時の授業担当教員のコメントからわかることは、基本的な語彙や文法は身に付いているが、学部入学をして日本語での授業を十分理解したり、宿題のレポートを適切に書いたりする能力が身に付いたとは言い難いという点である。

担当教員のコメント (抜粋)

- 語彙レベルと聴解能力がアンバランスで、語彙知識は中上級以上だが、音としてとらえることが難しい
- わからないことをしっかり日本人に聞くという姿勢もうかがえ、日本人学生とうまくタスク活動をこなしていた
- 基本的なことは身につけているので、焦らず落ち着いて読めばより深く理解できる
- 中・上級の語彙力は上がってきているが、聞いて理解できる音声語彙を更に増やすように努力してほしい
- 論理的文章構成の基礎を身につけることができた。語彙に関しては意欲があるものの、使い分け等に関して不確実なところもある

「日本語文法・語彙」のクラスでは、絵画を見て、なるべく多くの情報をそこから説明するタスクを行った。どこから、どうしてそう思うのかを具体的に言ってもらった。以下の表は、ベン・シヤーン作「解放」(1945年)を見て、授業開始時と終了時の学生の発話を比較したものである。

表1 学生の発話の比較

	授業開始時		授業終了時	
	発話回数	語彙数の平均	発話回数	語彙数の平均
学生A	16	12.3	7	34.9
学生B	21	17.0	16	35.7

文型や語彙のレベルは分析しておらず、単純に

学生の発話数と一回の発話時の語彙数(言い直しや繰り返しは含むが、「ん」「あー」「うん」「なんか」といった言い淀みの言葉や教員の質問に対するあいづちは除く)の平均のみを表にした。学生の発話数が減っていることは、教師が「どうしてそう思うのか」「どこからそういえるのか」などの質問をしなくても、自分で言いたいことを発話しているということがわかる。また、一回の発話時の語彙数の平均が倍増しているの、教師からの促しがなくても、考えていることが言えるようになったと考えられるだろう。

発話例(3) <同じ学生>

● 授業開始時

T:この絵の中で何が起きているんでしょうか。

S:建物がめちゃくちゃ壊していました。

T:どこが建物ですか。

S:あー、屋根とか壁。

T:どうして建物が壊れていると思いましたか。

S:あー、爆弾だと思います。

● 授業終了時

T:この絵の中で何が起こっていますか。

S:この絵の中で、戦争が起きていると思います。なぜかという、この絵の中には、建物がめちゃくちゃこわれてしまいましたし、子どもたちがあそびところがない、うん、が、その背景は、とても、あー、戦争みたいと思います。

「科学技術日本語」のクラスにおいても、担当教員が作成したテストの点数が授業開始時に比べ、終了時は2倍以上になった。これらの結果から、本コースにおいては一定の日本語能力の向上が見られたと言える。

しかしながら、学生の当初の日本語レベルからの向上はあったとはいえ、コース担当教員のコメントからもわかるように、学部入学をして他の日本人学生と同じように講義を聞いたり課題をこなしたりしていくことができるほどの日本語運用能力を十分身につけたとは言えない。学部入学後も、引き続き日本語学習を続け、とくにアカデミックジャパニーズと専門分野の日本語に関する学習に取り組むように指導していく。

5 今後に向けて

終了時の学生のアンケートには、もっと会話の授業を受けたかった、自分の専門に関する授業を受けたい、時間割がバラバラで大変だった、授業外で勉強する方法を教えてほしい、といった声があった。

今回は来日する学生のレベルもはっきりわか

らず、どんな内容でどのくらいの時間を割り振ればよいかわからず、手探りでカリキュラムを作成、実施した。研修初級コースのように、1週間を通して決められた内容・教科書を複数の教員がチームティ칭ングで行うことも考えたが、今回は技能別に分け、それぞれの教員がカリキュラムとクラス目標を設定し、評価を行った。この方法では学生がバラバラしたコースだと受け取ったようだった。

技能別に分けたとはいっても、どのクラスでも指定された技能の学習だけでなく、他の技能を使った活動も行う。例えば、読解であれば、読む前にトピックについて話したり、読解後に感想を書いたりすることで、いろいろな活動を行うことになる。それであれば、初級コースのように複数の教員が同じ科目を担当する形でもいいのかも示れない。

すべてのクラスをわけたことで、それぞれのクラスの目標や進路、評価に統一が取れなかった。全体の目標はあったものの、具体的な到達点を明確にしていなかった。次年度は、終了時に目指す学生の姿、評価の方法などを統一化して明確にし、学部の授業に問題なくついていける程度の日本語能力を習得できるよう、カリキュラムの改善を図っていききたい。